

「巻頭特集」 日向の水中綱引き

豊漁と無病息災を願う、美浜の冬の風物詩

若狭湾とつながる日向湖の湖畔に位置する美浜町日向地区。古来、漁業を産業としてきた漁師町で、毎年1月の第3日曜日には、恒例の祭り「日向の水中綱引き」が行われる。江戸時代初期から続くともいわれ、昭和55年には国の選択無形民俗文化財に指定された。

橋の欄干から飛び込み 綱を切ろうと競い合う

色とりどりの大漁旗がひるがえり、運河には綱が渡される。綱引きの準備が整えられ、時刻は14時。鉢巻きに白いパンツ姿の男衆が、運河に架かる太鼓橋（日向橋）に現れるや、欄干の一番高いところから、気合いを発しながら、次々と飛び込んでいく。水中で東西に分かれるのだが、日向の集落では橋を境にして、それぞれの地域を「東」「西」と通称しており、住まいする側（東か西）へ泳いで向かう。



日向青年会会長 森下翔太さん

東西どちらかの綱が切れたところで、祭りは終了となる。時間にして20分ほどだが、水から上がってきた男衆の肌は真っ赤だ。荒々しくもみ合った痕も、体のあちらこちらに見られる。切れた綱は海の神に捧げるため、外海に流す。

日向湖と若狭湾を結ぶ 運河完成を祝って始まる

漁師町では、漁の無事や豊漁を祈願する祭りがよく行われているが、勇壮で豪快なものが多い。日向の水中綱引きも、迫力と威勢の良さでは他と肩を並べる祭りである。そのうえ、由来として語り継がれてきた話には大蛇まで登場する。

昔、運河に大蛇が出て、川をふさいでしまった。漁に出られず困っていたところ、「蛇は自分より大きいものを恐れるので、薬で大きな綱を作って張り渡せば、恐れて近づかない」という村の長老の助言通りにしたら、蛇を追い払うことができた。村人た



綱練りで行われる神子。天井から藁を吊し、3人1組で「ヨイヤサヨイヤサ」の掛け声に合わせて、藁を足しながら綱を練っていく

いよいよ綱引きが始まる。実際は綱を引き合うのではなく、綱は運河の両岸にある杭に結ばれていて、互いに自分たちの側の綱を早く切ろうと競い合うのだ。

藁を練って作られた綱は、太さ30センチ、長さ40メートル超。ねじったり、ほどいたり、時には噛みつきたりしながら、引きちぎろうと格闘する。

しかし、水に濡れた綱は締まって固くなる。水中のため足がかりがなく、踏ん張りがきかず、易々と切れない。刺すように冷たい水に、長時間浸かっているのは厳しいので、綱には「オチ」と呼ばれる、ほどけやすい場所が1カ所作つてある。皆、その1点を集中的に狙う。

東西どちらかの綱が切れたところで、祭りは終了となる。時間にして20分ほどだが、水から上がってきた男衆の肌は真っ赤だ。荒々しくもみ合った痕も、体のあちらこちらに見られる。切れた綱は海の神に捧げるため、外海に流す。

ちが縁起の良いその綱に触れようとして、いつしか綱引きが始まったのだと伝える。日向川に現れた大蛇が、悪病や災いをもたらしたため、皆で退治した、といういい伝えもある。引きちぎったり、むしったり、歯で噛みつきたりと、大蛇を退治する様子を再現したのが、この祭りだとも語り継がれている。通説としては、小浜藩による運河の開削工事を起源とする。寛永12（1635）年、小浜藩主の酒井忠勝が村の陳情を受け、日向湖を船だまりにするため、若狭湾と湖を結ぶ水路を開削した。その結果、日向湖は良港となり、大漁が続いた。忠勝による運河完成と豊漁を祝って、祭りが始められたという。

諸説あるものの、江戸時代初期から行われてきたのは確からしい。厳寒のなか繰り広げられる勇壮な水中綱引きを一目見ようと、毎年多くの見物客が詰めかける。

伝統行事の運営を担う 青年会が4年前に復活

祭りの運営は、昔から地元の青年会が中心になって執り行ってきた。

まず準備として、綱の材料となる軽トラック2台分の藁と、運河に掲げる約60枚の大漁旗の手配がある。そして、祭り当日の早朝には、稲荷神社の「長床」と呼ばれる集会所で、綱を作る「綱練り」を行う。3時間ほどかけて綱ができあがると、運河に運び、張り渡す。並行して、大漁旗も取り付けていく。こうした1連の流れ、綱練りの技



橋の欄干から威勢よく飛び込む男衆。青年会のメンバーに限らず、毎年40人ほどが参加する。20～30代が中心だが、小中学生から中高年までと幅広い。60歳を超えて飛び込んだ人もいたそう

江戸時代初期から始まったとされる、国の選択無形民俗文化財指定の祭りを、4年前に復活した日向青年会が盛り上げる。

術、綱引き前に詠われる日向独特の節回しの伊勢音頭などは、長らく青年会によって継承されてきた。ところが少子化に加え、進学・就職で若者が流出。会員の減少から組織が成り立たず、平成16年に解散となる。

その後は日向区の区長や役員が代わりを務め、祭りを担ってきた。だが、4年前に日向青年会が復活した。現会長の森下翔太さんによれば、近年になって地元に戻ってくる若者が増え、再結成に至ったという。

「霽や雪が降っていても、寒風が吹き荒れていても、祭りは行われま

す。正直、水の中は冷たいというよりも痛いですね。それでも天候が良くて、見物客も大勢いる時は、少し長めに綱引きをして見せることもあります」と森下さんは内情をそっと話してくれた。

青年会の会員28人のうち、漁師をしているのは2人だけだそう。漁師町の祭りならではの慣習といった部分は、時とともに変わらざるを得ないかもしれない。だが、伝統の祭りに対する真摯で熱い思いは、これからも地域で守り受け継がれていくことだろう。



(左)「ヨイヤサヨイヤサ」と声を上げ、綱に挑む男衆 (右)正午には運河に綱が渡され、大漁旗が掲げ終わる。橋のたもとでは地元婦人会や燈台クラブによるブリ汁、にごり酒、魚介の焼き物などのバザーや振る舞いがある